Japanese Association of Educational Psychology

280 日本教育心理学研究, 1998, 46, 280−290

青年の自己愛傾向と自尊感情，友人関係のあり方との関連[2]

小 塩 真 司[1]

本研究の目的は，自己愛傾向と自尊感情との関わりを検討すること，そしてその両者が，青年期における友人関係とどのように関連しているのかを検討することであった。自己愛人格目録(NPI)，自尊感情尺度 (SE-I)，友人関係尺度が265名 (男子 146 名, 女子 119 名) に実施された。NPI の因子分析結果から，「優越感・有能感」「注目・賞賛欲求」「自己主張性」の 3 つの下位尺度が得られた。NPI と SE-I との相関から，自己愛は全体として自尊感情と正の相関関係にあるが，特に「注目・賞賛欲求」は SE-I と無相関であり，SE-I の下位尺度との関係から，高い自己価値を持つ一方，他者の評価に敏感であり，社会的な不安を示すといった特徴を有していることが明らかとなった。これらの結果は，NPI の妥当性を示す 1 つの結果であると考えられた。また，友人関係尺度の因子分析結果から，友人関係の広さの次元と浅さの次元が見出され，その 2 つの次元によって友人関係のあり方が四類型された。この友人関係のあり方と NPI，SE-I との関係が分析された。結果より，広い友人関係を自己報告することと自己愛傾向が，深い友人関係を自己報告することと自尊感情とが関連していることが明らかとなった。このことから，青年期の心理的特徴と友人関係のあり方とが密接に関連していることが示唆された。

キーワード：自己愛，自尊感情，友人関係，青年期。

問題と目的

理論的あるいは臨床的な先行研究では，青年期は自己愛の高まる時期であると言われている。例えば，Jacobson (1964) は，青年は乳幼児期の愛情対象から離脱していく程度に応じて，自己愛的な没入に浸る長い時期を通過すると述べている。同様に，小此木 (1981) は，親からの受身的対象愛が満たされなくなるために，青年期には自己愛が高まるとしている。その他，Kohut も青年期に親からの分離に伴って自己愛人格障害の臨床症状を露呈すると述べている (伊藤, 1992)。このように，青年期は自己愛の病理と密接な関わりを持つとされている。しかし，DSM-IV (APA, 1994) に指摘されているように，自己愛の特性は青年期によく見られるが，それは必ずしも自己愛人格障害に移行することを意味しない。従って，現代青年の心性を探る上で，人格障害としてではなく，青年期特有の人格的特徴の 1 つとして，自己愛に注目することは，意味のあることだと考えられる。

青年期における自己愛傾向とは，自分自身への関心の集中と，自信や優越感などの自分自身に対する肯定的感覚，さらにその感覚を維持したいという強い欲求によって特徴づけられよう。このような自己愛傾向は，特に対人関係の側面に影響を及ぼすと考えられる。元来，Freud によって定式化された自己愛は外界に対する関心の喪失を特徴としており，自己愛と主体にとって意味のある対人関係とは両立不可能であると考えられていた。しかし近年，自己愛の概念が再定義されるにつれて，両者は両立可能であると考えられるようになってきた。例えば Kohut は，自己愛の発達を対象愛の発達とは異なる過程をたどるものと見なし，自己愛に特徴的な対人関係が存在すると主張した。そして，そのような対人関係における他者とは“自己とその本能投資の維持とに役立つべく利用される対象であるか，あるいはそれ自身が自己の重要な部分として体験される対象”(Kohut, 1971) であるとし，特に後者を自己対象 (self-object) と呼んだ。また Akhter & Thomson (1982) は，ナルシシストの対人関係上の特徴として，表面上は深さが欠如し，他者に対する軽蔑と価値の低下を伴い，内面的には他者に対する強い羨望と喝采への渇望を抱いていると述べている。日本においては，青年論という枠組みの中でも自己愛が取り上げられているが (福島, 1992 など)，そこでは自己愛的な若者が親密な対人関係を回避する傾向を持つといった指摘がなされている。そこで本研究では，青年期における対人関係のうち，最も重要な意味を持つと考えられる友人関係に焦点を当て，自己愛傾向との関連を探索的に検討して

[1] 名古屋大学大学院教育学研究科

[2] 本研究の一部は，日本教育心理学会第39回総会にて発表された。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

いくこととする。

また，本研究では，自己愛の類似概念の1つと考えられる，自尊感情についても取り上げてみたい。多くの臨床家や理論家らによって様々な自己愛に関する記述がなされているが，自己愛の最も基本的な意味は自分が自分を愛すること（小此木, 1981）であり，自己概念と結びついている自己の価値と能力の感覚—感情—(遠藤, 1992）と定義される，自尊感情（自尊心 ; self-esteem)との関連が示唆される。しかし一般に，自尊感情の高い人は対人関係においても不安緊張が低く，とらわれを持つことなく他者を受容しうると考えられている。自己愛と自尊感情との類似性が示唆されるにもかかわらず，その対人関係上の特徴は異なっているのである。

さて，近年，自己愛を様々な心理検査や質問紙により実証的に捉えようとする研究が散見されるようになっている。特に，Raskin & Hall (1979) は，正常な人格特性としての自己愛傾向を測定する目的で，自己愛人格目録（Narcissistic Personality Inventory ; NPI）を開発している。そしてそれ以降，自己愛の測定的研究が活発になってきており，現在までに数多くの研究がなされてきている。日本においても，宮下・上地 (1985)，大石・福田・篠置 (1987)，佐方 (1986) が Raskin らの NPI を日本語化して後，自己愛傾向に関する調査研究が行われるようになってきている。NPI の信頼性と妥当性については，これまでに数多くの先行研究で検討されてきており，今や NPI は，青年期における自己愛的人格を研究する上で，欠くことのできない1つの測定具（宮下, 1991）となるに至っている。

NPI を用いた先行研究では，青年期の友人関係との関連については皆無に等しいが，自尊感情についてはいくつかの検討がなされている。海外における先行研究では，NPI は様々な自尊感情尺度との間に正の相関関係が報告されてきている（Emmons, 1984 ; Raskin, Novacek & Hogan, 1991 ; Rhodewalt & Morf, 1995 ; Watson & Biderman, 1993)。また，NPI の下位尺度すべてが自尊感情と正の相関関係にあるわけではなく，特に搾取性・権利意識（Exploitativeness/Entitlement）下位尺度は自尊感情とは無相関であることが報告されてきている（Emmons, 1984 ; Jackson, Ervin & Hodge, 1992 ; Rhodewalt & Morf. 1995)。ところが，日本において NPI と自尊感情との関わりを検討した研究は見当たらない。従って，NPI と自尊感情との関わりを検討し，自己愛と自尊感情の共通点，相違点を探ることは，日本語版 NPI によって測定される自己愛傾向の意味を検討する上で重要なことであろう。

このような問題意識に基づき，本研究では自己愛傾向と自尊感情との関連を，そして，その両者と青年の友人関係のあり方との関連を検討することを目的とする。

方　法

1. 調査対象

愛知県内の国立・私立大学生・専門学校生265名（平均年齢 19.5 歳)。内訳は，男性146名（全て大学生 ; 20.1 歳）女性119名（大学生 39 名, 専門学校生 80 名 ; 18.9 歳）に調査を行った。

2. 尺度

自己愛人格目録（NPI）　自己愛傾向を測定する尺度として，大石ら (1987) によって日本語化された NPI 全54項目を用いた。回答は「とてもよく当てはまる」から「全く当てはまらない」までの5件法で測定された。もともと Raskin & Hall (1979) が DSM-III (APA, 1980) の自己愛人格障害の記述から作成した NPI は，二者択一の強制選択方式で回答する方式がとられている。大石らによる NPI も同様の方式がとられているのであるが，宮下・上地 (1985) は7件法で，佐方 (1986) は5件法に回答方式を修正するなど，日本における NPI は様々に形を変えて用いられてきている。本研究では，あくまでも一般の人々の中に見られる自己愛傾向を問題とする立場から，二者択一方式ではなく，5件法で自己評定させる方式をとることにした。

自尊感情尺度（SE-I）　本研究では自尊感情の尺度として，遠藤・安藤・冷川・井上 (1974) による自尊感情尺度（SE-I ; 23 項目）の項目を「はい」「いいえ」の2件法で回答できるようにいくつかの項目内容を変更し，用いた。遠藤らは Janis & Field (1959) によって作成された自尊感情尺度をもとに SE-I を作成している。また，井上・冷川・藤原 (1982) は，SE-I を因子分析し，「他者からの評価を気にする程度」「自己の価値観」「社会的場面における不安」「劣等感」という4つの因子を見出している。さらに，Y-G 性格検査との相関から，この尺度で測定される自尊感情が高いほど情緒的安定性，社会的適応性が高く，社会的活動性，主導性が高いことを見出している。

友人関係尺度　現代青年における友人関係の特徴を的確に捉えるために，岡田 (1993) の友人関係様式に関する項目から，友人との関わり方を記述した27項目を用意した。岡田の研究では当てはまる項目にいくつでも印をつける形で調査を行っており，数量化理論III類

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

に基づく分析の結果,「友人と表面的に関わる―心情的に深く関わる」軸,「個別的関わり―集団的関わり」の軸と同時に1.対人退却傾向,2.群れ志向,3.やさしさ志向,という3種類の友人関係の様式を見出している。しかし,本研究ではそれぞれの項目に対して「普段友達とどのようなつき合い方をしているか」を「よくそうしている」から「そのようなことはほとんどしない」までの4段階で回答できるように,岡田の尺度の項目内容を若干修正して用いることにした。また,本研究では青年の全体的な友人関係を捉えるために,特定の他者を想定させない方式で調査を行った。

3. 調査時期

上記の尺度を含む質問紙を1996年11月に各大学,専門学校において講義時間を利用し集団実施した。

結　果

1. 各尺度の分析

(1) NPIの分析　NPI全54項目に対して男女込みで因子分析(主因子解・プロマックス回転)を施したところ,固有値の減衰状況と因子の解釈可能性から3因子が妥当であると考えられた。そこで,因子負荷量が.35以上であることを基準とし,各因子に十分な負荷量を示さない17項目を分析からはずし,残りの37項目に対し再度因子分析を行った。37項目による全分散のうち回転前の3因子によって説明できる割合は41.10%であった。TABLE 1にプロマックス回転後の因子パターンを示す。本研究では全54項目のうち37項目を分析の対象とすることにした。また,男女別で因子分析を行った結果,多少の項目の移動は見られたものの,各因子の指標となる項目の移動は見られず,ほぼ同様の因子構造が見られた。従って,この3因子は男女共通のものであると見なしてもよいであろう。

各因子は以下のように解釈された。第1因子は20項目からなり,自分が才能にめぐまれており,他者よりも優れており有能である,といった内容の項目群からなる。この因子は,自尊感情や自信といった非常に強い自己肯定感を表わす項目によって構成されている。そこで,第1因子を「優越感・有能感」因子と命名した。第2因子は8項目からなり,ほめられたい,注目の的になってみたいなど,自分が他者に注目されたり賞賛されることを期待する項目から主になっている。そこで,第2因子を「注目・賞賛欲求」因子と命名した。しかしこの因子は,単に注目されたい,賞賛されたいという欲求のみではなく,他者を支配したい,権威を持ちたいといった権力志向的な意味合いをも含んでいる。また,第3因子は9項目からなり,自分の意見をはっきりと言い,自ら決断する,また,やや自己中心的という言葉で表わすことができるような内容の項目群からなっている。そこで,第3因子を「自己主張性」因子と命名した。なお,ここで見出された各因子に負荷量の高い項目の得点を合計し,それぞれ「優越感・有能感」得点,「注目・賞賛欲求」得点,「自己主張性」得点とした。さらに,全37項目の得点を合計し,NPI総得点とした。37項目によるNPI総得点と,54項目によるNPI総得点との間の相関は$r=.98$ ($p<.001$)であった。α係数はTABLE 5に示されている。

日本における先行研究では,NPIから5因子(大石,1989),6因子(三船・氏原,1991)が見出されており,また,先行研究では男女で因子構造が異なっていることが報告されてきている(大石ら,1987)。しかし,本研究で見出された3つの因子に関しては,筆者による他の被験者群への調査においても同様の因子構造が見出されており(小塩,1997),かつ本研究と同様その調査においても男女の明確な因子構造の差は見出されていない。従って,本研究で見出されたNPIの3つの因子は比較的安定しており,かつ男女共通に見られるものであると考えられる。

また,「注目・賞賛欲求」と「自己主張性」は「控えめではない」という点で,共通した意味を持っている。しかし,第2因子が「注目されたい」といった受動的かつ願望的な意味合いの項目群から主に構成されているのに対して,第3因子は自ら進んで行動を起こすといった,能動的かつ積極的な項目群から構成されている点が異なっていると考えられた。

(2) 自尊感情尺度(SE-I)の分析　SE-I全23項目について男女込みで因子分析(主因子解・プロマックス回転)を行った。固有値の減衰状況と因子の解釈可能性から,4因子解が妥当であると判断した。そして,十分な負荷量の見られなかった3項目を省き,残りの20項目について再度因子分析を行った。TABLE 2にプロマックス回転後の因子パターンを示す。なお,20項目による全分散のうち回転前の4因子によって説明できる割合は44.60%であった。

各因子の内容は以下のように解釈された。第1因子はいずれの項目も,対人関係場面において他者の評価を気にし,不安に思うといった内容からなっている。これは井上(1992),井上ら(1982)と同様,他者からの評価を気にする因子であると考えられるので,「評価過敏」因子と命名した。第2因子は第1因子と類似した項目内容からなっている。しかし第1因子に比べると,

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

TABLE 1　NPI の因子分析結果（Promax 回転後の因子パターン）

項　　目	F1	F2	F3
43. 自分自身では要領もいいし賢明さも備えていると，私は思っている	.67	.05	-.06
46. 周りの人々はたいてい私の権威を認めてくれる	.62	-.12	.15
14. 私は才能に恵まれた人間であると思う	.61	.04	.02
53. 自分は他人より有能な人間であると思う	.60	.08	.05
7. 周りの人達が自分のことをよい人間だといってくれるので，自分でもそうなんだと思う	.57	.02	-.16
49. 私が言えば，どんなことでもみんな信用してくれる	.56	-.11	.02
18. 私は周りの人が学ぶだけの値打ちのある長所をいくつか持っている	.56	.12	.14
50. 私は生まれつき，リーダーとしての素質を持っている	.55	.17	.20
54. 私は周りの人達より，ずばぬけたものを持っていると思う	.54	.07	.11
19. 自分の思う通りに人を使うのは，それほど難しいことだとは思わない	.53	-.07	-.06
15. 私はよいリーダーになれる自信がある	.53	.16	.16
9. 私に接する人はみんな，私という人間をしぜんに気に入ってくれるようだ	.53	-.18	.05
47. 私はもともとリーダーになるのが性格に合っている	.49	.25	.16
26. 私は自分の体を見るのが好きだ	.48	.19	-.07
21. 私には自分の体を人に自慢したいという気持ちがある	.47	.18	-.17
20. 周りの人が私の期待しているだけの敬意を払ってくれないと，気持ちが落ちつかない	.41	.17	-.17
41. 人に好かれるのは，私自身にどこか魅力的なところがあるからだと思う	.40	.17	.13
27. 私は美しいものを決して見逃さない優れた感性の持ち主だ	.39	.03	.20
8. もし，この私が世界を自由にすることができるのなら，もう少しましな世の中にできると思う	.38	.03	.07
32. 人は誰でも私の話を喜んで聞きたがる	.38	-.16	.20
44. 私には，注目の的になってみたいという気持ちがある	-.08	.75	.03
12. どちらかといえば，私は注目される人間になりたい	-.13	.71	.24
48. 私は偉い人だといわれる人間になりたい	.15	.62	-.14
38. 私は支配欲が強い方だと思う	-.12	.60	.08
36. 私は人からほめられることを望んでいる	.05	.59	-.36
17. 私は人々を従わせられるような権威を持ちたいと思う	.10	.59	-.02
6. 私は強い人間だと思われたい	.06	.55	-.11
28. ここというときには，私は人目につくことを進んでやってみたい	.09	.48	.22
3. どうやら私は，控えめな人間というには程遠い人間だと思う	-.37	.17	.68
16. 私は自分の意見をはっきりいうほうだ	.01	.02	.61
10. 私はどんなことでも，あまり気兼ねなどしないで自分の好きなように振る舞っている	.01	-.13	.54
23. 私は自分で責任を持って決断するということが好きである	.25	-.08	.47
5. どんなことでも，敢えて挑戦するというようなやり方が，私の性格に合っている	.13	.10	.44
45. これまで私は自分の思い通りのやり方でやってきたし，今後もそうしたいと思う	.13	-.14	.44
37. 自分自身の気持ちに忠実に生きることが，まず重要である	-.01	-.05	.42
33. いつも私は話しているうちに，話の中心になってしまう	.22	-.06	-.41
2. 私は，周りの人に影響を与えることができるような才能を持っている	.33	.10	.40

因子間相関	F1	F2
F2	.50	
F3	.49	.36

この因子は対人関係場面において自分自身が上手く振る舞うことができるかどうかを気にする，いわば自意識過剰な傾向を測定していると考えられる。そこで「自意識過剰」因子と命名した。第3因子は自分に価値があり，自分の能力に自信を持っているといった内容からなっている。そこで，先行研究と同様「自己価値」因子と命名した。第4因子は自己嫌悪や自らを低く見積もるといった内容からなっている。そこで，先行研究と同様「劣等感」と命名した。

なお，因子1，2，4に対応する下位尺度について，

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

TABLE 2 SE-I の因子分析結果（Promax 回転後の因子パターン）

項目	F1	F2	F3	F4
23. 他の人があなたのことをどのように考えているかということが，あなたは気になりますか	.75	.09	.10	.11
19. 他の人があなたと一緒にいることを好んでいるかどうかについて，あなたは気にしますか	.74	-.05	.05	.12
22. あなたの友達や知り合いの中にあなたのことをよく思っていない人がいるかもしれないと考えるとき，あなたはそのことを気にしますか	.61	-.04	.07	.22
12. あなたは，人前を気にしたり，はにかみをおぼえることがありますか	.59	.03	-.05	-.10
11. あなたは，他の人々がすでに集まって話し合っている部屋に自分1人で入っていくような場合，気兼ねや不安をおぼえますか	.56	.19	-.13	-.10
9. あなたは，自分が他の人々とどのくらいやっていけるかどうかについて気にしますか	.56	.05	-.01	.15
17. とんでもないミスやばかにされるような大失敗をしでかしたとき，あなたはそのことを気にする方ですか	.53	-.29	-.01	.17
13. あなたは，クラスや自分と同年輩の人々のグループの前でしゃべらなければならないとき，心配したり，不安に思ったりしますか	.45	.18	-.28	-.31
10. あなたは，あなたの仕事ぶりや成績を審査する立場にある人の批評を気にしますか	.45	.26	.14	-.02
14. 他の人々が観ているところで，ゲームやスポーツをやっており，それにぜひ勝とうと思っている場合，あなたはふつうとり乱したり，まごついたり(あがったり)しますか	-.02	.68	-.13	.01
4. あなたは，自分の過誤(ミス)は自分のせいだと感じることがありますか	-.23	.60	.17	.30
16. 人と一緒にいるとき，あなたはどんなことを話題にしたらよいかについて，困りますか	.20	.52	-.07	-.18
15. 他の人からあなたが優等生とみられているか，あるいは劣等生とみられているかということについて，あなたは気になりますか	.24	.41	.25	.00
20. あなたは，恥ずかしくてどうにもならないと思うことがありますか	.17	.38	.01	.18
7. 一般に，あなたは自分のいろいろの能力について自信を持っていますか	.03	.03	.73	-.16
3. 自分の知っている人々が，いつかはあなたを尊敬の眼を持って仰ぎみる日がくると確信していますか	.06	.10	.67	.09
2. あなたは，自分が価値ある人間であると感じていますか	.02	.00	.64	-.13
5. あなたは，自分について落胆するあまり，何が一体価値あるものだろうと疑いをおぼえることがありますか	.03	.20	-.06	.72
6. あなたは，自己嫌悪をおぼえること(自分で自分がいやになること)がありますか	.21	-.16	-.01	.62
8. あなたは，自分にはうまくやれることなど全然ないといった気持ちになることがありますか	.03	.13	-.44	.57

因子間相関	F1	F2	F3
F2	.34		
F3	-.14	-.17	
F4	.15	.03	.00

それぞれの因子に負荷量の高い項目の得点を全て逆転して加算することでその下位尺度得点とするので，低い得点をとるほどその下位尺度の意味する特性が強いという解釈になる（以下，各下位尺度得点を「評価過敏R」得点，「自意識過剰R」得点，「劣等感R」得点とする）。また，第3因子に対応する下位尺度得点については負荷量の高い項目の得点を合計することで「自己価値」得点とし，さらに全20項目の得点を合計し，SE-I得点とした。α係数はTABLE 5に示されている。

(3) 友人関係尺度の分析

a．一次因子分析 友人関係項目を男女込みで因子分析（主因子解，プロマックス回転）し，固有値の減衰状況と因子の解釈可能性から5因子解が妥当であると判断した。そして，十分な負荷量の見られなかった3項目を省き，残りの24項目について再度因子分析を行った。全分散のうち回転前の5因子によって説明できる割合は45.54%であった。TABLE 3にプロマックス回転後の因子パターンを示す。この5因子は，因子の抽出順や負荷量の高い項目が，男女別に因子分析を行った場合とほぼ同様であったため，男女込みの結果を用いた。

第1因子に高い負荷量を示した項目は，友達からの評価を気にし，お互いに気をつかい，深い関係になることを避けているような友人関係のあり方であると解釈できる。そこで，「気遣い」因子と命名した。第2因

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

TABLE 3　友人関係尺度の因子分析結果（Promax 回転後の因子パターン）

項　目	F1	F2	F3	F4	F5
1. 友達と一緒にいるときでも別々のことをする	-.02	.23	-.06	-.56	.01
2. 1人の友達と特別親しくするよりはグループで仲良くする	-.02	.15	.13	.64	-.21
3. お互いの約束は決してやぶらない	-.02	.02	.39	.04	.08
5. 心を打ち明けて話をする	-.19	.12	-.07	.24	.63
6. お互いの領分にふみこまない	-.20	-.06	.62	.02	.11
7. ウケるようなことをする	-.07	.87	.08	.00	.04
8. 突然まじめな話をして友達をしらけさせない	.05	.17	.42	.15	.08
9. 相手に甘えすぎない	-.12	.01	.50	-.04	.03
10. 相手の言うことに口をはさまない	.16	.08	.62	-.03	-.20
11. 互いに傷つけないよう気をつかう	.49	-.06	.26	.12	-.10
12. 冗談を言って相手を笑わせる	-.12	.89	.02	.00	.04
13. お互いのプライバシーには入らない	.14	-.02	.63	.03	-.11
14. 相手の考えていることに気をつかう	.38	.12	.34	-.12	.22
16. 話題についていけるよう気をつける	.60	.06	-.02	.34	.05
17. 意見や好みがぶつからないよう気をつける	.66	-.08	-.10	.03	.07
18. 自分を犠牲にしても相手につくす	.29	-.05	.04	-.24	.59
19. 楽しい雰囲気になるよう気をつかう	.43	.58	-.05	-.06	.04
20. あたりさわりのない会話ですませる	.62	-.04	.03	-.10	-.12
21. まじめな話題にならないよう気をつける	.42	.25	-.16	-.08	-.28
22. みんなで一緒にいる	-.10	.05	-.02	.80	-.03
23. 真剣な議論をする	-.05	.08	.04	-.13	.72
24. 友達から取り残されないようにする	.50	.03	-.16	.54	.11
26. 友達グループのメンバーからどう見られているか気にする	.66	.01	-.07	-.12	-.02
27. 友達グループのためにならないことは決してしない	.39	-.20	.19	.13	.22

因子間相関	F1	F2	F3	F4
F2	.10			
F3	.14	.05		
F4	.08	.25	-.01	
F5	.00	.12	-.02	.12

子は友達づき合いの中で，自ら積極的にその場を楽しい雰囲気にしようとする内容を持った因子といえる。そこで，「積極的楽しさ」因子と命名した。第3因子は「自分は自分，他人は他人」といった，あまり他者と交わらない，お互いに深いところまで立ち入らないといった友人関係のあり方を意味すると考えられる。そこで，「一線を引いたつき合い方」因子と命名した。第4因子はグループで親しくし，個人個人がばらばらに活動するよりもむしろ，みんなと一緒に何かを行うといった友人との関わり方を表わす因子であると考えられる。そこで，「集団同調」因子と命名した。第5因子は，心を打ち明け，真剣な議論をするといった，内容を持つ項目が高い負荷量を示している。そこで，「自己開示的関わり」因子と命名した。

b．二次因子分析　先の因子分析で得られた友人関係5因子の因子間相関と因子内容を見ると，5因子間の関係は均等ではなく，まとまりがあると考えられた。そこで，友人関係のあり方をさらにまとめるために，先の因子分析結果からプロマックス回転後の因子得点を推定し，その得点をもとに二次因子分析を行うことにした。固有値1.0を因子数決定の基準とし，主因子解，プロマックス回転により2因子を抽出した（TABLE 4）。全分散のうち回転前の2因子によって説明できる割合は50.30％であった。

TABLE 4　友人関係尺度の二次因子分析（Promax 回転後の因子パターン）

		F1	F2
F1	気遣い	.10	.72
F2	楽しさ	.69	.18
F3	一線	-.12	.76
F4	同調	.72	.01
F5	開示	.57	-.23

因子間相関	F1
F2	.09

第Ⅰ二次因子に特に高い負荷量を示したものは，「F2積極的楽しさ」「F4集団同調」「F5自己開示的関わり」であった。また，第Ⅱ二次因子は，一次因子のうち「F1気遣い」と「F3一線を引いたつき合い方」が高い負荷量を示した。これらを検討すると，第Ⅰ二次因子が，広く多くの人間とつき合っているという，対人関係上の広さの側面を意味しているのに対し，第Ⅱ二次因子は，自己防衛的な対人関係上の構えを意味していると考えられる。従って，それぞれ第Ⅰ二次因子が「広い―狭い」，第Ⅱ二次因子が「浅い―深い」といった2つの独立した友人とのつき合い方を意味していると解釈することが可能であろう。また，第Ⅰ二次因子と第Ⅱ二次因子との相関は r＝.09であり，この2つの因子はほぼ直交しているとみなすことができる。そこで，このデータを改めて因子分析し，バリマックス回転による直交解を求めた。その結果，直交解でも同一の結果が得られた。従って，この2因子は直交し独立しており，友人関係を構成する2つの次元であると考えられる。そこで，得られた直交解から各個人の2つの因子得点を推定し，それを組み合わせることによって，FIGURE 1のように友人関係を4つに分類した。

ここで見出された2つの二次因子は，岡田（1993）による友人関係の2つの軸や，落合・佐藤（1996）による

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

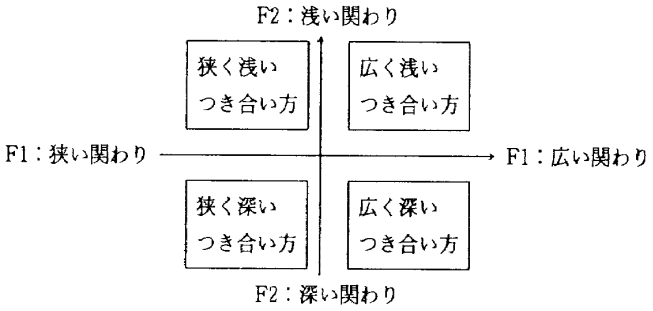

FIGURE 1 友人関係のあり方の4型

友達とのつき合い方を構成する2次元と共通するものである。本研究の結果は岡田とは異なる方法で測定・分析されており，また落合らとは異なる尺度を用いて調査・分析が行われているのであるが，これらの先行研究とほぼ同様の意味を持つ二次因子が得られたことで，青年期における友人関係のあり方が再検証されたともいえよう。

2. 各尺度間の関係

NPI，SE-I，友人関係一次因子の相関関係をTABLE 5に示す。NPIの下位尺度間の相関は全て.1%水準で有意であった。しかし，相関係数を見ると，「注目・賞賛欲求」と「自己主張性」との間の相関が他と比較してやや小さめであることが特徴としてあげられる。また，SE-Iの下位尺度間の相関関係を見ると，「自己価値」と「評価過敏R」「自意識過剰R」とが無相関であった。NPI総得点とSE-I総得点との間には正の有意な相関関係が見られたが，それぞれの下位尺度間の相関関係は一様ではない。すなわち，「優越感・有能感」はSE-Iのうち「自己価値」と強い正の相関関係を示したが，他の下位尺度とはそれほど強く結びついているわけではない。また，「注目・賞賛欲求」は，「自己価値」と正の，「評価過敏R」「自意識過剰R」とは負の有意な相関関係にあった。「自己主張性」はSE-Iのすべての下位尺度と正の有意な相関関係にあった。これらは，NPIの各下位尺度の特徴を明確に示しているといえよう。さらに，NPI，SE-Iと友人関係一次因子との関連に注目すると，NPIとその各下位尺度は「積極的楽しさ」「自己開示的関わり」と正の有意な相関を示す一方，SE-Iとその下位尺度は「自己価値」を除き，「気遣い」と負の有意な相関を示した。

なお，性差の検討の結果，「優越感・有能感」につい

TABLE 5 NPI，SE-I，友人関係一次因子の相関関係と平均，標準偏差，α係数

	NPI				SE-I							
	Total	優越・有能	注目・賞賛	自己主張	Total	評価過敏R	自意識過剰R	自己価値	劣等感R	M	SD	α
NPI												
Total	—									99.68	19.74	.92
1. 優越・有能	.93***	—								48.43	11.83	.90
2. 注目・賞賛	.73***	.53***	—							24.42	6.35	.83
3. 自己主張性	.73***	.56***	.32***	—						26.83	5.68	.77
SE-I												
Total	.29***	.29***	-.09	.52***	—					6.31	3.94	.79
1. 評価過敏R	.16*	.13*	-.14*	.43***	.86***	—				2.19	2.33	.79
2. 自意識過剰R	.00	.01	-.24***	.24***	.70***	.48***	—			1.81	1.31	.51
3. 自己価値	.60***	.60***	.33***	.47***	.40***	.10	.08	—		1.07	1.01	.54
4. 劣等感R	.18**	.19**	-.02	.27***	.60***	.34***	.24***	.24***	—	1.24	1.01	.59
友人関係一次因子												
1. 気遣い	-.05	-.02	.14*	-.28***	-.50***	-.47***	-.42***	-.07	-.26***	.00	1.00	—
2. 楽しさ	.29***	.19**	.23***	.35***	.05	.07	.06	.06	-.11	.00	1.00	—
3. 一線	.05	.08	-.04	.07	.02	-.01	-.08	.15*	.04	.00	1.00	—
4. 集団同調	.09	.05	.13*	.06	.05	-.02	.10	-.05	.14*	.00	1.00	—
5. 開示的	.30***	.22***	.24***	.30***	.04	.00	.04	.15*	-.05	.00	1.00	—

* p<.05 ** p<.01 ***p<.001

Rは得点が低いほどその傾向が強い。

友人関係一次因子の各得点はプロマックス回転後に推定された因子得点である

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

て男性(平均 49.86, SD11.73)の方が女性(平均 46.61, SD11.74)よりも得点が高く($t(263)=2.24$, $p<.05$)，「自己開示的関わり」について女性（平均 .28, SD .91）の方が男性（平均 -.23, SD 1.01）よりも得点が高い（$t(261)=4.26$, $p<.001$）という結果が得られた。

3. 友人関係による四類型と他尺度との関係

先に得られた2つの友人関係二次因子得点の平均値によって被験者をH群とL群に分け，2×2の分散分析を行った（なお，先の分析をふまえ，第I二次因子を「広さ」，第II二次因子を「浅さ」とする）。分散分析の結果，いずれの尺度得点に関しても有意な交互作用は見られず，「広さ」あるいは「浅さ」のいずれか，あるいは双方の主効果のみが見られた。

NPI総得点とすべてのNPI下位尺度得点（「優越感・有能感」「注目・賞賛欲求」「自己主張性」）の4得点は「広さ」の主効果が有意であった（それぞれ $F(1,261)=14.54$, $p<.001$, $F(1,261)=6.94$, $p<.01$, $F(1,261)=10.37$, $p<.001$, $F(1,261)=17.06$, $p<.001$）。これらは，広い友人関係を営んでいると自己報告する者ほど高い得点を示す傾向にあることが分かった。また，SE-Iの第2因子である「自意識過剰R」得点は「広さ」と「浅さ」双方の主効果が有意であった（それぞれ $F(1,261)=3.97$, $p<.05$; $F(1,261)=16.02$, $p<.001$）。これは，広い友人関係を営む者，また深い友人関係を営んでいると自己報告する者ほど高い得点を示す傾向にあることが分かった。さらに，SE-I総得点とその第1因子である「評価過敏R」は，「浅さ」の主効果が有意であった（それぞれ $F(1,261)=16.83$, $p<.001$, $F(1,261)=14.18$, $p<.001$）。この両尺度は，深い友人関係を営んでいると自己報告する者ほど高い得点を示すことが明らかとなった。なお，「自己価値」「劣等感R」に関しては，有意な効果は見られなかった。

さらに，これらの関係をより明確に示すために，NPIとSE-Iの各尺度得点を平均0，標準偏差1に標準化し，友人関係4群別の得点プロフィールを描いた（FIGURE 2）。FIGURE 2には，以下のように，それぞれの友人関係を営む者の心理的な特徴が明確に示されていると考えられる。

「広く浅いつき合い方」は，みんなと一緒に楽しくつき合っているが，同時に自分の本音を出さず表面的で，互いに気遣い合うといった友人関係のあり方である。このような友人関係を営んでいる者は，自己愛傾向，特に「注目・賞賛欲求」が強く，自尊感情は低い傾向にある。「広く深いつき合い方」は，みんなと一緒に楽しくつき合い，かつ自分の考えを積極的に相手に伝え，互いに分かり合おうとするような友人関係のあり方である。このような友人関係を営んでいる者は，自己愛傾向のうち特に「自己主張性」が強く，かつ特に自意識過剰に陥らないという意味での高い自尊感情を持っている。「狭く浅いつき合い方」は，みんなと一緒につき合うというよりも狭い，限定された友人との関係を重視し，かつその友人関係の範囲の中でも自分の本音を出さず，一線を引いた友人関係のあり方である。このような友人関係を営んでいる者は，低い自己愛傾向，低い自尊感情によって特徴づけられている。また，特

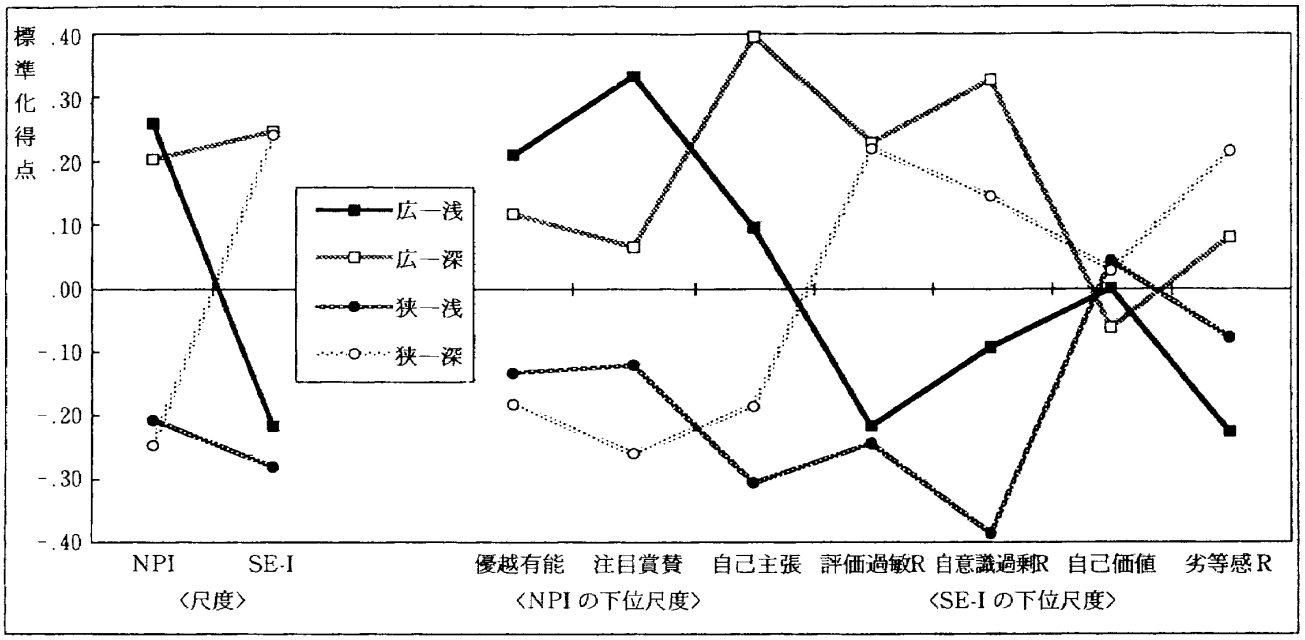

FIGURE 2 友人関係4群別のNPI，SE-I各得点（標準化後の得点）

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

に自意識過剰な傾向の強い者でもある。「狭く深いつき合い方」は，限定された友人関係と，互いを分かり合おうとするような友人関係のあり方である。このような友人関係を営んでいる者は，低い自己愛傾向と高い自尊感情を持つ傾向にある。

考　察

1. NPIと自尊感情との関連について

NPIとSE-Iとの関連より，NPIは全体として自尊感情と正の相関関係にあった。これは海外における先行研究と同様の結果である。しかし，NPIとSE-Iとの相関はそれほど高いものではなかった。NPIは正常な人格特性としての自己愛傾向を測定する目的で作成された尺度であるが，DSM-IIIにおける自己愛人格障害の記述をもとにしている。一方，自尊感情尺度が心理的な適応の指標として用いられることが多いことを考慮に入れると，両者が全く同じものを測定しているとは考えにくい。そこで本研究では，SE-Iを因子分析することにより，より詳しくNPIとの関連を検討した。

結果，NPI総得点は，「自己価値」と最も高い正の相関を示し，他の下位尺度とはそれほど高い相関を示さなかった。この結果の理由として，「優越感・有能感」と「自己価値」の項目内容の類似性があげられる。すなわち，この両下位尺度はともに，自分に対する強い肯定的感覚を意味する内容からなっているという点である。しかし項目内容をより詳しく検討すると，「優越感・有能感」が持つ，他者に対する優越感という内容は「自己価値」には含まれていない。従って，「優越感・有能感」が意味する自分に対する肯定的感覚は，他者との比較も含むものであり，一方「自己価値」は，より個人的な，他者との比較を必要としない肯定的感覚を意味するという点で，両者は異なっていると考えられる。

また，「注目・賞賛欲求」は「自己価値」と正の相関を示す一方，「評価過敏R」「自意識過剰R」と負の相関を示した。つまり，この下位尺度は自己肯定感に関連する一方，社会的な場面においては他者の評価を気にし，自意識過剰になるといった特徴を合わせ持っていると言える。さらに，「自己主張性」は全ての自尊感情得点と有意な正の相関を示した。すなわち，この下位尺度は自分自身を肯定し，かつ社会的場面においても不安や気兼ねを覚えないといったことに関連している。このことは，「自己主張性」が能動的で積極的な自己愛傾向の一側面を測定するという解釈に非常によく当てはまっていると考えられる。これらの結果は，「注目・賞賛欲求」と「自己主張性」との差異を明確に示していると言えよう。

2. 自己愛・自尊感情と友人関係との関連について

結果から，「広い」友人関係を自己報告する青年ほど自己愛傾向が高く，「深い」友人関係を自己報告する青年ほど自尊感情が高い傾向にあることが分かった。従って，自己愛傾向と自尊感情とは，青年の友人関係の異なる側面に関連していることになる。本研究で見出された友人関係の「広さ」とは，みんなと一緒に楽しくつき合うという友人関係のあり方であり，「深さ」とは，互いに気をつかうことなく親密なつき合いをするというあり方である。青年にとって，親密で信頼できる友人との関係は，何よりもまず心理的安定感をもたらす（原田, 1989）と言われている。従って，本研究で見出された友人関係の「深さ」と自尊感情との関連は，青年期の親密な友人関係が心理的適応に影響を及ぼすことを意味していると考えられる。一方，自己愛傾向は自尊感情とは異なり，友人関係の「広さ」に関連している。自己愛傾向が高いことは，自分自身に対する肯定的感覚を意味するが，その感覚は他者との比較の中において成り立っている。すなわち，特定の相手と接するよりも多くの友人と接している方が，比較の対象となる友人が多いため，自分自身の肯定的感覚を維持しやすいと言えるのではないだろうか。

また特に，本研究で見出された「広く浅いつき合い方」は，現代青年の特徴として多くの著作，研究で触れられてきている友人関係のあり方である。そしてこのような友人関係を自己報告する者は，自己愛傾向のうち特に「注目・賞賛欲求」を高く報告した。自尊感情との関連において見られたように，「注目・賞賛欲求」に代表される自己愛傾向は積極的に自己を肯定する自尊感情に関連するにもかかわらず，社会的な不安にも関連している。このような自己愛の側面は，自分では自信を持っているが，同時にその自信は他者からの評価によって容易に崩れてしまうようなあり方を意味している。従って，自分自身に対する肯定的評価が崩れてしまう可能性が高くなるような深い対人関係を回避し，広く表面的につき合う傾向と関連するのであろう。

本研究の結果は，近年指摘されている青年期の友人関係の希薄化や表面化を捉える際に，自己愛という概念を考慮することが有用であることを示唆しているといえよう。しかし日本において，自己愛傾向に関する調査研究は端緒についたばかりである。今後，自己愛傾向の高い者，低い者が友人をどのように捉えているのか，またどのような基準で友人を選択しているのか

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

など，さらなるデータを蓄積することによって，青年期における自己愛傾向の様相を明らかにしていく必要があるだろう。

引用文献

Akhter, S., & Thomson, J. A. 1982 Overview : Narcissistic personality disorder. *American Journal of Psychiatry,* **139**, 12—20.

American Psychiatric Association 1980 *Deagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders Third Edition : DSM-Ⅲ.* Washington, DC : Author.

American Psychiatric Association 1994 *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders Forth Edition : DSM-Ⅳ.* Washington, DC : Author.

Emmons, R. A. 1984 Factor analysis and construct validity of the narcissistic personality inventory. *Journal of Personality Assessment,* **48**, 291—300.

遠藤辰雄 1992 セルフ・エスティームの定義と展望 遠藤辰雄・井上祥治・蘭千尋（編） セルフ・エスティームの心理学—自己価値の探求 ナカニシヤ出版 Pp. 8—25.

遠藤辰雄・安藤延男・冷川昭子・井上祥治 1974 Self-Esteemの研究 九州大学教育学部門紀要, **18**, 53—65.

原田唯司 1989 青年の社会的発達 久世敏雄（編） 青年の心理を探る 福村出版 Pp. 85—116.

福島 章 1992 青年期の心—精神医学からみた若者— 講談社現代新書

井上祥治 1992 セルフ・エスティームの測定法とその応用 遠藤辰雄・井上祥治・蘭千尋（編） セルフ・エスティームの心理学—自己価値の探求 ナカニシヤ出版 Pp. 26—36.

井上祥治・冷川昭子・藤原正博 1982 自尊感情の測定 遠藤辰雄編 アイデンティティの心理学 ナカニシヤ出版 Pp. 64—84.

伊藤 洸 1992 コフートの自己心理学 心理臨床大事典 培風館 Pp. 107—110.

Jackson, L. A., Ervin, K. S., & Hodge, C. N. 1992 Narcissism and body image. *Journal of Research in Personality,* **26**, 357—370.

Jacobson, E. 1964 *The self and the object world.* New york : International Universities Press.

Janis, I. L., & Field, P. B. 1959 Sex differences and personality factors related to persuasibility. In Hovland, C. I. & Janis, I. L. (Eds.), *Personality and Persuasibility,* New Haven : Yale University Press. Pp. 55—68.

Kohut, H. 1971 *The Analysis of the Self.* New York : International Universities Press.

三船直子・氏原 寛 1991 青年期の自己愛人格について—実証的研究を中心にして— 大阪市立大学生活科学部紀要, **39**, 199—213.

宮下一博 1991 青年におけるナルシシズム（自己愛）的傾向と親の養育態度・家庭の雰囲気との関係 教育心理学研究, **39**, 455—460.

宮下一博・上地雄一郎 1985 青年におけるナルシシズム（自己愛）的傾向に関する実証的研究(1) 総合保健科学, **1**, 51—61.

落合良行・佐藤有耕 1996 青年期における友達とのつきあい方の発達的変化 教育心理学研究, **44**, 55—65.

岡田 努 1993 現代青年の友人関係に関する考察 青年心理学研究, **5**, 43—55.

小此木啓吾 1981 自己愛人間 朝日出版社

大石史博 1989 自己愛的人格に関する研究(4)—共感性との関係について— 日本心理学会第53回大会発表論文集, 155.

大石史博・福田美由紀・篠置昭男 1987 自己愛的人格の基礎的研究(1)—自己愛的人格目録の信頼性と妥当性について— 日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 534—535.

小塩真司 1997 青年における自己愛的性格傾向に関する研究—尺度の検討と友人関係との関連— 名古屋大学大学院教育学研究科修士論文（未公刊）

Raskin, R., & Hall, C. S. 1979 A narcissistic personality inventory. *Psychological Reports,* **45**, 590.

Raskin, R., Novacek, J., & Hogan R. 1991 Narcissism, self-esteem, and defensive self-enhancement. *Journal of Personality,* **59**, 19—38.

Rhodewalt, F., & Morf, C. C. 1995 Self and interpersonal correlates of the narcissistic personality : A review and new findings. *Journal of Research in Personality,* **29**, 1—23.

佐方哲彦 1986 自己愛人格の心理測定—自己愛人格目録(NPI)の開発— 和歌山県立医科大学進学課

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

程紀要, **16**, 63—76.

Watson, P. J., & Biderman, M. D. 1993 Narcissistic personality inventory factors, splitting, and self-consciousness. *Journal of Personality Assessment*, **61**, 41—57.

謝　辞

本論文は，1996年度に名古屋大学教育学研究科に提出した修士論文の一部を加筆・修正したものです。本論文執筆にあたり，名古屋大学教育学部　小嶋秀夫教授には様々な御助言をいただきました。記して厚く御礼申し上げます。

(1997.8.27 受稿, '98.4.17 受理)

Relationships among Narcissistic Personality, Self-Esteem, and Friendship in Adolescence

ATSUSHI OSHIO (GRADUATE SCHOOL OF EDUCATION, NAGOYA UNIVERSITY) JAPANESE JOURNAL OF EDUCATIONAL PSYCHOLOGY, 1998, 46, 280—290

The purpose of this study was to examine relations among narcissistic personality, self-esteem, and friendship in adolescence. The Narcissistic Personality Inventory (NPI), the Self-Esteem Inventory (SE-I), and a questionnaire regarding friendship were administered to 265 subjects (mean age 19.5 years). A factor analysis of the NPI revealed three significant factors labeled : "a sense of superiority and competence", "a need for attention and praise", and "self-assertion". Only the "self-assertion" and the "sense of superiority and competence" factors showed a significant, positive correlation with the SE-I. As a result of the factor analysis on the friendship questionnaire, friendship was categorized as a two-dimensional space, with intimacy on one axis and the number of friends on the other. The results indicated that adolescents with more friends tended to report high narcissism, while adolescents with more intimate friendship were inclined to report high self-esteem.

Key words : narcissism, self-esteem, friendship, adolescence.

NII-Electronic Library Service